

## 2. どろ水におし流されていた

中川村中川西中学校二年 K・S

二十八日の朝、五時五十分ごろのことです。ざあざあ雨の音、ごうごう天竜川の音に、私はうとうととしていた。

「おい、早く早く。」

と母のさけび声。何かとび起きた瞬間に、どかんと大きな物が背にかぶさって来た。もうその時は身体一っばいどろ水につきり、なにがなんだかわからない。どうして外に出られたのか、腰までつかって、どろ水におし流されていた。弟も頭からすっかりどろ水につきり流されていた。やっとおとうさん、お母さん達に引き出されました。頭はがんとしているし、なんだか身体がぶるぶるとふるえている。そのうちに大勢近所の人達がかけつけてくれました。深い水、ずぼずぼ落ち込む畑の中を夢中で、隣のおじさん達のゆう導で、高い田の土手まで、ひとまずかけ上がった。そしておばさんの家までどろんこのまま行きました。家につくとあがりはなの上にしばらく横になりました。どろの衣類をぬぎ、弟はふろに入り、私は身体をふいて、おばさんの着物をかりて着がえた。おそろしさとかなしさで、やたらに涙が出てくる。一瞬にしてあの惨状。学用品も楽しみに集めた人形やこけしも全部どろ水にうまってしまったのだ。着がえをおわって一安心したものの気持がおちつかず、家はどうなってしまったのか、馬豚、山羊、にわとり、種々の家畜も皆生きているだろうか。そう思うと一もくさんに家に向かつて走った。となりのおばさんの家までくると、おかあさんはおばさんの着物をかり、横になっていた。足にはほうたいをしていた。私も少しはすりぎずをしたが、大けがはしなかった。となりで朝飯をいただいたが、むねが一っばいでおいしくはなかった。母と私と家まで来てみると近所の人達が大勢集まって、

「えらいことになってしまった。」

と口々に話しながらどろにつかった家財道具を整理したり、つぶされた家のとりにわしやらで大きわざだった。崩れた山は赤はだかになり、まだぐたぐたと、どろ水をおし出している。私はまだ大きく崩れて来るのではないかと心配でなりません。おどおどしながら、山の方ばかり見ていると近所のおじさん達が、「Kちゃん、おっかなかったら。山はあれだけくんでしまったから、もう大きくは、くんでこんに。」と喋ってくれたので少しは安心ができました。

おかあさんと、となりの家までダンスに入っていた衣服などを運んだ。どんどんかたづけしてくれる。おじさん達からどろんこの教科書ももらって、私は一生懸命に洗いました。おとうさんに、

「本は洗ってもだめだ。」

と言われましたが、すてる気にはなれず、物置のすみに片よせておきました。お勝手場や台所はすっかりどろ水につきり、大きな石が床の上にくろがっている。そのうちに消防団の人達が、ポンプを持って来て戸や床上をざあざあと洗ってくれました。庭にはどろ水の中に、なべ、かま、おはち、種々なものが一

っばいおし流されている。朝ごはん前だったので、おかまにごはんが一つばい  
つまったままどろの中にういている。どろの上を親猫が、まだ小さかった小猫  
をあっちに行ったり、こっちにきたりして、一生懸命さがしている。私はおそ  
ろしくて何も手がつけられない。どうしたらよいのだろう。今夜はどこへぬる  
のか。頭の中はそんなことばかりでがらがんする。その晩は危険だからといっ  
て、家中、本家にひなんして泊めてもらうことになった。夕飯も少しも食べれ  
なかった。ローソクのあかりのまわりに大勢あつまって、今朝のおそろしかつ  
たことを話しながら、

「災難にあっても皆命びろいできてよかった。」  
とおとうさん達は話していた。外は又はげしい雨の音、ごうごうという水の音  
で床に入ってもねむれなかった。はやく夜が明けてくれればよいが、とあんな  
に夜の長く感じた時はありませんでした。

そして今でも、ごうつという音がすれば、ヘリコプターの音も、自動車の音  
も、皆、山崩れの音のような気がしてなりません。

(三十六年)